

氏名	劉 ルーシャン
ヨミガナ	リュウ ルーシャン
学位の種類	博士（映像メディア学）
学位記番号	博映第8号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 移住者の物語～ナラティブの権利としての文化的実践

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桂 英史
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木幡 和枝
（副査）	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桐山 孝司
（副査）	立命館大学	教授	（産業社会学部）	池内 靖子
（副査）	京都精華大学	教授	（人文学部）	レベッカ・ジェニスン

（論文内容の要旨）

グローバル化時代の条件のもとで、「国家」という枠組みを超えられない現実と直面する中、私は自らの移住者としてのアイデンティティを発見し、今までに固定しているように見えた世界が、実際には可変的／パフォーマンス的であるということに気づかされてきた。こうした発見をきっかけに、私は抑圧された感情や思考といった内なる声を他者と共有するために、パフォーマンスによる創作活動に積極的に取り込んで来た。

これらの創作活動は、グローバル化時代に生きるマイノリティの物語を記録し再構築すること、芸術と社会の関係性に注目することによって、新しい価値観や想像力を生み出すこと、さらには、さまざまな境界を生きる人々に精神的な帰属場所を提供し、流動的なアイデンティティを可視化することで、文化的差異への理解を深めることを目的としている。

本稿では、こうした創作活動の原点となった国家や文化の間に位置するアイデンティティの問題とこうした思考のプロセスから生まれたパフォーマンスの活動報告を通じて、グローバル化と向き合うパフォーマンスの批判的思考と実践の可能性について考察を深めたい。

（総合審査結果の要旨）

本審査においては、中間審査で審査員より出された意見を反映させる形で改稿した論文の予稿である、『移住者の物語』（仮題）の改訂版に基づき、著者本人から口頭発表を行うと同時に、審査員との質疑応答が行われた。中間審査で発表された「ライフストーリー」と「研究ノート」および「活動記録」という三つの骨子からなる論文構成は今回も維持されたが、前回の質疑応答を受けて「ライフストーリー」と「研究ノート」との間の概念的な整理を著者は「物語」という結節点を強調することで一定の成果を達成している。

「語る」や「話す」はポストコロニアリズム思想にとっても重要な行為遂行的なパフォーマンス（行為）として、ホミ・バーバやガヤトリ・スピヴァクに代表されるポストコロニアリズム思想においても最も重要な概念の一つとして重視されている。ここで著者が述べている行為遂行的な発話としての物語は、ホミ・バーバがジョン・オースティンの行為遂行的な発話を拡大させ従属的地位にある人々について、知識人的な立場で語ることは可能なのかという投げかけた物語の権利をめぐる問いである。多くのディアスポラやアイデンティティは個人の意志を表現として昇華させようとする、ナラティブ（物語）という形式に回収される。個人的な経験を重視して「国民国家」に向き合おうとすると、ナラティブの可能性に賭けようとする事は避けられない。それを意識しながらの実践を継続する著者の意志は、1960年代から継続的に評価されているコミュニティアートという社会的活動とも若干異なっており、いわゆるアートプロジェクトとも一線を画する

ことになっている。その差異が著者の論点や実践のコンテキストを豊かにしてくれるものと期待されるが、その差異や論拠について言及するための必要条件は未だ充分とは言えない。

とはいえ、今日日本で問題が浮き彫りになりにくいディアスポラやネイションなど、マイノリティをめぐる実践を、あえて日本を中心に継続し、政治と文化の接点での微妙かつ重要な実践を明晰に言語化した点は、たとえ著者の表現形式や方法論に共感できぬ人々も高く評価せずにはいられないだろう。

本発表で述べられた骨子と今後の課題への取り組みを聞く限り、論文の改稿をさらに進めることが期待されるため、12月の本論文を提出する資格はあると認め、本審査の可否は「合」とする。